

フレーム意味論に基づいた「痛い」の多義性に関する考察*

—フレーム意味論、認知文法、概念写像理論の接点を探る—

阪口 慧

keisakaguchi24@gmail.com

キーワード： 形容詞 フレーム意味論 意味の極大主義 意味分類 多義性

要旨

本稿では日本語形容詞「痛い」の多義性に対する考察を行う。これまで、形容詞の意味に関する研究においては意味分類に重きが置かれてきたが、多くは典型的な意味、用法のみを扱ったものである。これらの意味分類はそれぞれの語彙を提示する（また依拠する理論が提示する）タイプのいずれかに当てはめようとし、語の意味の豊富さを矮小化して記述してしまう恐れがある。本項ではこれを意味の極小主義的アプローチと呼ぶ。これに対し、語の参与項、及び参与項間の関係性の豊富さをありのまま記述するアプローチであるフレーム意味論を意味の極大主義と位置づけ、これを本稿における意味記述の方法的枠組みとして採用する。なお、本稿では日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から採取した例を観察し、「痛い」には〈身体的苦痛〉〈金銭的損失〉〈精神的苦痛〉〈評価〉〈程度性〉といった様々な意味、用法を有することを示す。また、身体的苦痛を根源の意味と位置付けた場合、どのように他の意味に拡張したか考察する。

1. はじめに

本稿では日本語形容詞「痛い」の多義性に関する分析を行う。これまでの形容詞研究において「痛い」は感覚形容詞、または感情形容詞の一つとして扱う研究が多い。（cf. 西尾 1972, 八亀 2008, 村上 2013）一例を挙げると、西尾（1972）では「ーがる」との接続が可能であること、主語の人称制限の有無から「痛い」を「嬉しい」などの感情形容詞と同様の性格があると述べている。ただし、これらの研究の多くは対象となる語の典型的な例のみを対象に分析を行い、各語彙がどのような意味的なタイプに属するかを示した研究が多い¹。導入として「痛い」の限定用法における実例を見よう。

* 本稿の執筆にあたって東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室 西村義樹教授より貴重なご指摘とご助言を賜った。深く感謝申し上げたい。頂戴したコメントをもとに加筆・修正に努めたが、残された課題、議論が不十分な点の責任はすべて筆者に帰すものである。

¹ 西尾（1972）は属性形容詞と感情形容詞は完全に排他的なカテゴリではないことを認めている。また、八亀（2008）も「痛い」に関しては八亀（2008）が提示した形容詞の5分類のうち、二つのタイプに認められる意味的な特徴を有することは指摘している。ただし、(1) ～ (5) で示す拡張的な意味に関しては言及が行われていない。

- (1) 痛い {脚/注射}
- (2) 痛い出費
- (3) 痛い {エラー/失敗/減点}
- (4) 痛い {視線/言葉/心}
- (5) 痛い人

上記5例における「痛い」はいずれも意味が異なる²。(1)は〈肉体的苦痛〉に関する意味として典型的な例である。この時、痛みを感じている場所を示す身体部位や痛みの源泉となるモノ/コトも共起可能である。(2)は金銭的な〈損失〉に関わる意味である。この意味において共起する語は「出費」などである。(3)は〈金銭に関わらない損失〉に関わる意味である。共起語としては結果として発生した「減点」「エラー」「失敗」の様に失敗自体を示す行為名詞を伴う。

(4)は〈精神的苦痛〉に関わる意味である。そのため、精神的な苦痛の源泉となる「視線」「言葉」、その心情を示す「心」などが共起語として現れる。また(5)に見る「痛い」の意味は対象者に対する〈評価〉を示す語である。対象者の言動や風貌に対して「恥ずかしい」や「見ていられない」といった感覚を示す場合に用いられる比較的新しい用法である。このように一つの語であっても多義的な意味を並べると、一つの語は単一の意味的なタイプに属するという、従来の研究の導く結論は短絡的であるといえる。本稿では分類に主眼を置いたこれまでの形容詞の意味研究の問題点を指摘するとともに、認知言語学的アプローチを採用し、多義性、拡張の意味を考察範囲入れた意味分析及び記述の立場を取る。

2. 先行研究：従来の意味分類に対する批判と対案

2節は、先行研究を導入し、従来の意味分類研究に対して批判的な考察を加えつつ、言語現象の実態を正しく記述するうえでとるべきアプローチはどのようなものか論じる。先行研究において、1章で示した例(2)～(5)のような「痛い」の拡張の意味を扱った研究は調査の限り見られない。西尾(1972: 39-40)は「歯が痛い」というように身体部位が主語として取れること、また「インフルエンザの予防注射が痛い」(西尾 1972:34)というように痛みを与えるようなものを感情形容詞の属性的用法として例示している。八亀(2008)は時間的限定性の有無を一つの軸とし、客観的性質と評価的性質のどちらかが強いかをもう一つの軸として4象限に分ける形で形容詞の分類を行っている。その中で、「痛い」に関しては時間的限定性が少なく、客観性が大きいAグループとしての特徴と、時間的限定性があり、評価的性質が高いEグループとしての特徴の両方を有するCグループとして分類している³。なお、八亀(2008)の研究は形容詞というクラスの意味的な側面、文中での機能に焦点を当て、現代日本語の形容詞を総括的に記述する目的のもとに行われた研究であるため、「痛い」に関して詳細な例示や分析、また多

2 いずれも日本語書き言葉均衡コーパスにおいて観察可能な用例である。

3 Aグループは典型的な属性形容詞がここに分類される。「大きい」など。Eグループはいわゆる感情形容詞の大半がここに分類される。「嬉しい」など。

義性に関する言及がなされているわけではない。なお、形容詞の意味分類研究はほかにも多くあるが、ここでは紙幅の都合上、現代日本語の形容詞研究において代表的な2つの研究を取り上げた。ただし、多くの研究が次節以降で述べる意味分類における問題を抱えている場合がある。

2.1. 意味的な分類の抱える問題

意味分類に主眼を置く研究はいくつかの問題を抱えている場合がある。一つは例外に対する説明力の低さである。例えば西尾（1972）は「痛い」の典型的な意味・用法に関する分析を提示したが、前述（2）～（5）の様な身体感覚領域以外での意味・用法に対する説明は為されていない。また、八亀（2008）の研究に対しても同様のことが言え、時間的限定性が少なく、客観的性質を有した対象への評価を差し出すような表現は実際に観察可能（e.g. 注射は痛い（ものだ））なため、八亀が提示した分類は言語使用の実態と異なっているということになる。

次に、分類の妥当性という側面から批判を行う立場もある。守田（2013）は科学的な研究の多くが分類を目的としたものが多いとし、言語学、特に意味論において行われる分類がどのようなものであるかを批判的に考察したものである。分類には2種類のものがあり、両者ともに人間の理解などを介することから厳密に区分はできないが、一つは自然を理解するという目的のために行った自然分類と呼ばれるものであり、もう一方は人間が何らかの目的や便宜上の都合に基づいて行う人為分類である。科学に求められる分類はその内の前者であるとする。守田（2013）の指摘では言語学における品詞分類は範列関係（*paradigmatic relation*）および連辞関係（*syntagmatic relation*）といった統語的分布に基づいており、文法性のテストなどに対する恒常的な反応に基づいて行われることから自然分類の一つと考えられる。一方、意味的分類の多くは科学的な自然分類ではなく対象の恣意的な分類、すなわち人為分類であるが、その分類の目的や分類基準が他の研究者と共有し易いものであり、現象をよく説明するものであれば、その分類は妥当性のある分類とする。この観点から形容詞の分類について批判的な考察を加えよう。

形容詞の意味的分類において度々観られる言説が、「主観的な表現＝感情形容詞」、「客観的な表現＝属性形容詞」というものである。西尾（1972）、八亀（2008）などの研究では分類の前提として主観性と評価性（客観性）というものを導入している。ここでは、八亀（2008）が提示した主観性、評価性という分類軸について考えてみたい。いわゆる感情形容詞とされる「悲しい」に関しては八亀の分類では主観性が高い表現とされる。一方、「かたい」という形容詞は評価性が高く客観的な表現であるとしている。術語や定義の差はあるものの、他の研究においても「悲しい」「かたい」という形容詞の分類であれば前者が感情形容詞、後者が属性形容詞であるという分類に行き着くものが多い。しかし、主観的、客観的という分類軸は分類基準として妥当であると言えるだろうか。次の例について考えてみたい。

（6）ダイヤモンドは物質として非常に硬い。

（7）硬っ！何このパン？

- (8) こんな悲しい思いは二度としたくない。
 (9) 秋は枯れ行く木々の葉が悲しい。

まず (6) の例について考えてみたい。「硬い」という形容詞は「ダイヤモンド」という物質の硬度についてその度合いが高いことを示している。直感的にも八亀 (2008) が言うように客観的な語であると判断できる。一方、(7) に関してはどうだろうか。形式上は形容詞の語幹用法、または今野 (2012) で詳しく論じられているイ落ち構文の例である。今野 (2012) の指摘ではイ落ち構文は、話者の感覚や判断を伝達するのではなく表出する、いわゆる私的表現専用の構文である。その場合、一語で文が完結している「硬っ」は客観的というよりは極めて主観的な性質を帯びていると考えられる。なお、八亀 (2008: 42) は C グループにおける特徴として、形容詞が文頭に生起すると〈表出〉に近づく場合があることに言及しているが、ほかのグループに分類された語が文頭に現れた場合に関しては指摘がない。(7) はまさにその例の一つである。次に感情形容詞が現れた (8) をみよう。(8) では話者のある体験に対して「悲しい」という語が使われている。つまり、話者本人の心情、感情が現れた主観的な表現であるといえる。この文に関していえば、八亀 (2008) が指摘するように「悲しい」は主観的な性質を帯びている。一方、(9) で観られる「悲しい」の例は篠原 (2002) が指摘しているように、観察点の公共性 (cf. 本多 2005) が高く「秋」に関する情報を述べた例である。(8) と比較すると「悲しい」は客観的な性質を帯びていると言えるのではないだろうか。これは西尾 (1972) も指摘する属性形容詞と感情形容詞の中間事例ともいえる例である。ここから浮かび上がる疑問は、言語表現における主観性や客観性という意味的な性質は語が有するものではなく、文、または構文が担うものではないかというものである。そのため、生起環境によって異なってしまう意味的要素を語彙の分類基準として用いることは望ましくないと考えられるのではないだろうか。また、根本的な問題点として、「何をもって主観的であるとし、何をもって客観的であるとするか」という議論は主観 (的/性)・客観 (的/性) を分類指標としている研究の中でもほとんど行われていない。分類基準として用いる概念の定義を明確に提示しないこと、また主観的/客観的という意味的要素は語に付随する恒常的な性質として認められないことから、分類基準として主観 (的/性)・客観 (的/性) を用いることに関しては再考の余地がある。

2.2. 語彙項目と意味的タイプの関係性：意味分類の極小主義と極大主義

意味分類の最大の問題は分類を主眼におくあまり、意味や捉え方の豊富さを切り捨ててしまう可能性を含む点にあると考える。これは意味分類における確証バイアスとも呼べる問題である。言語研究に見られる確証バイアスは黒田 (2018: 602) も指摘している通りであり、言語表現の観察は理論に依存する部分がある。意味分類にこの指摘を当てはめる場合、意味分類は提示しようとしている (または、依拠する理論が提示した) 分類に依存し、観察を歪めている可能性がある。従来の意味分類において多くみられる研究は複数の語彙項目 l^n を任意の意味的タイプ t に集約するものである。図で示すと次のようになる。(図 1) このように、語彙を必ず

一つの語彙に集約するための分類はすでに建てられた分類ありきで捉えてしまう可能性が高い。これを本稿では便宜的に意味分類の極小主義的アプローチと呼ぶ。

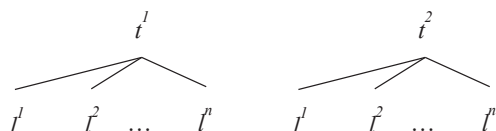


図 1: 従来の意味分類の語彙項目と意味的タイプの関係性（意味分類における極小主義）

先に述べたように先行研究に対し、「痛い」という一語を挙げ簡素な批判的考察を行ったところ「痛い」は先行研究において示された意味分類の複数の意味的タイプに跨った用法、多義性を有することが観察された。この時、必要な意味分類のモデルは図 1 の様に一つの語が一つのタイプに結合し、複数の語を包括的に一つのタイプに集約するものではなく、単一の語が複数のタイプに関連付けられることを記述出来るモデルである。これを便宜的に意味分類の極大主義的アプローチと呼ぶことにする。このモデルにおける語彙と意味的タイプの関係を図示すると次のようになる。

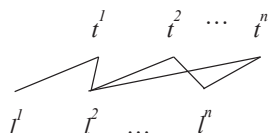


図 2: 理想的な意味分類における語彙項目と意味的タイプの関係（意味分類における極大主義）

上記、図 2 で示しているのは、語彙が複数の意味的タイプに分類可能であることを示している。ただし、多義的に意味が異なる場合、それは形式上（音声、形態、文字等）同一の語であるだけであって、別の語彙であり、結局は図 1 と同様のことを換言しているに過ぎないという批判を受ける可能性があるが、多くの場合、プロトタイプの意味と拡張的意味の明確な弁別は簡単に行えるものではない。そのため、単一の語は複数の意味的タイプに分類可能であるということを主張するためにこの図を示した。無論、プロトタイプの意味と拡張的意味を明確に弁別可能な理論が立てられ、音及び形式が同じであっても意味が異なる場合には、別々の語彙項目として登録するべきだとする立場を採る場合にはこのモデルは棄却され図 1 のようなモデルが採用されるべきである。

2.3. 意味論の極大主義的アプローチとしてのフレーム意味論

ここまで論じたように、意味の実態を正しく記述する理論は語彙を単一の意味的タイプに閉じ込めるものではなく、語及び参与項間の関係に基づいて語の意味を記述し、語と複数の意味

のタイプとの関係を記述出来る理論であると考え。したがって本研究ではフレーム意味論 (Fillmore 1982, Fillmore & Baker 2009) を意味記述の枠組みとして採用し、「痛い」の多義性分析を行う。フレーム意味論の分析は語彙の理解に必要な体系的な知識を記述するための枠組みである。フレームは「その中のどれか一部を理解するためには、その全体の構造を理解することが必要になるような関係で有機的に繋がっている体系的知識構造」(藤井・小原, 2003: 373) である。例えば Fillmore (1982: 121) で示された例だが、英語で「地面」を意味する二つの語 *land* と *ground* の使い分けを理解するためには、それらがどのような視点からみた地面なのか、また何と対比された地面であるかを体系的に理解していなくてはならない。*land* は *sea* (海) と対比された地面であり、*ground* は *air* (空) と対比された地面ということになる。この場合には語の理解に対比、及び視点が関係することが分かる。このように、フレーム意味論は Fillmore (1985) でも強調されている通り、真理値判断に基づいた意味論 (T-semantics) ではなく語を理解するうえで、語によって喚起される知識を記述するための意味論 (U-semantics) である。この知識をウェブ上の語彙情報資源として蓄積し構築されたものがフレームネット (FrameNet⁴) である。(cf. Fillmore & Baker 2001, Ruppenhofer et al. 2016)

ここで、フレーム意味論及びフレームネットの記述体系を形容詞の意味記述に用いた場合、どのような理論的な優位性を持つか考察したい。フレーム意味論の記述は言語表現からフレームを記述することを目的とする。何によってフレームが喚起されるか、フレームの参与項 (フレーム要素) は何か、また文中にはどのようなフレーム要素が現れているか (具現化されているか) を記述する。なお、フレーム要素には語の理解への関与が必須であるコアフレーム要素 (core frame elements)⁵ と比較的関与度が低いノンコアフレーム要素 (non-core frame elements) に分けられる。そして、語が多義性を持つ場合、その語は複数のフレームを喚起し得るとして記述される。2.2 節において従来の意味分類の問題点が語を単一のタイプに押し込めてしまう、極小主義的な傾向があることを指摘し、理想的な意味分類は意味の豊かさを矮小化することなく記述する極大主義的アプローチであるとした。意味的タイプという概念レベルをフレームに置き換えた場合、「文脈や伝達する意味が異なる場合、語が喚起するフレームは異なる」と定義づけるフレーム意味論は、意味分類における一つの極大主義的アプローチになり得ると言える。フレーム意味論的アプローチによって意味記述をする場合、参照するフレームは多くの場合フレームネット上に公開されたフレームの一覧 (Frame Index) となる。なお、現時点で掲載されているフレームの総数は 1224 種類である⁶。従来の意味分類の個数と比較すると細分類化されているものの、語の意味、語の理解に関わる知識の記述を 1224 種類のフレームに矮小化し兼ねないという点で、本稿が批判した手法と同様であるという批判を受ける可能性はある。しかし、フレーム意味論及びフレームネットにおけるフレームは閉ざされた概念体系 (closed conceptual

⁴ <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/> にてフレーム一覧 (Frame Index) などが公開されている。

⁵ Ruppenhofer et al (2016: 23)によると コアフレーム要素は次の様に定義される: A core frame element is one that instantiates a conceptually necessary component of a frame, while making the frame unique and different from other frames.

⁶ 2019 年 4 月 12 日におけるフレームの個数である。

class)ではなく、拡張可能性のある開かれた概念体系 (open conceptual class) である⁷。例えば語彙の分析において既存のフレームだけで語彙の使用の差を説明できない場合、フレームの細分化や、分析に必要な意味要素の拡張が行われる場合がある。Croft (2009) はベンガル語、ドイツ語、英語においてフレームの細分化の必要性が異なることを示した。このように、フレームネットにおけるフレーム一覧は現時点で蓄積されたものにすぎず、発展性、拡張性を有した概念体系である。

2.4. フレーム意味論を用いた比喩的意味の分析

ここまでフレーム意味論の導入と、形容詞の意味分析に導入することの意義について論じてきた。本節では、フレーム意味論を用いた比喩的意味の分析として Sullivan (2013) の分析例を紹介する。フレーム意味論及びフレームネットはフレーム間関係 (frame-to-frame relations) としてフレーム間の関係性のタイプも記述する。フレーム間関係には継承 (inheritance)、使用 (using)、視点 (perspective on) などがある。例として商取引フレームの例をみよう。例えば、sell (売る)、buy (買う) という語は同じ参与項 [BUYER] (買い手) [SELLER] (売り手) [GOODS] (商品) [MONEY] (金銭)、から構成される <Commerce_goods_transfer> ⁸フレームが理解に関係している。しかし、同一事態においても視点が異なる場合、動詞や主語の選択において異なりが生じる。この時フレーム意味論は視点の異なりを反映しフレームを細分化する。例えば、buy が主語として取ることが出来るのは買い手に制限される。この場合、視点は買い手の側に立っているため、より視点が限定された <Commerce_buy> フレームを喚起するとされる。

このフレーム間関係の一つに隠喩 (metaphor) を記述したものがある。Sullivan (2013) は隠喩写像理論 (Conceptual Mapping Theory: CMT) (cf. Lakoff & Johnson 1980, Lakoff 1993) における起点ドメイン (source domain) から目標ドメイン (target domain) において写像される単位はフレームであるとして分析している。なお、Sullivan (2013: 20-28) の分析ではドメインは複数のフレームの複合体と定義されている。例えば *in a sunny mood* という比喩表現の理解には *sunny* の字義通りの意味を理解するための光 (LIGHT) というドメインを構築するフレームの一つである <Location_of_light> フレームが、幸福 (HAPPINESS) というドメインに写像されているとする。複数のフレームから構成されるドメイン間において、どのフレームが写像されているかというのを示したものが図3 (Sullivan 2013: 40) である。例として、*He is in a sunny street.* という表現と *He is in a sunny mood.* を比較しよう。*He is in a sunny street.* は字義通りの意味で解釈され、*he* は [FIGURE] (図)、*street* が [GROUND] (地) という意味役割を担っている。一方、*He is in a sunny mood.* という表現では *he* は [EXPERIENCER] (経験者)、*mood* が [STATE] (状態)

⁷ 閉ざされたクラス (closed class)、開かれたクラス (open class) という Dixon (1977) の品詞のクラスの特徴に対する言及を参考にした。

⁸ フレーム名を表記する場合には *courier_new* という字体を使用し <Frame> の様に表記する。フレーム名は小大文字 (small capital) を使い、[FRAME_ELEMENTS] の様に表す。これはフレーム意味論における表記法に基づく。

という意味役割を担う。この文はある人物がどのような状態であるかを述べたものである。このように各要素がどのような対応関係にあるか、比喩的な意味において字義通りの意味がどのように理解に関わるかを捉えることを可能にしている。

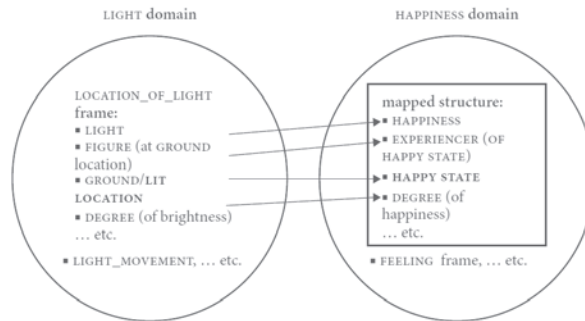


図 3: フレーム基盤の概念メタファーHAPPINESS IS LIGHT 写像モデル (Sullivan 2013: 40)

意味の記述単位を文中の要素が担うフレーム要素、そしてそれらの参与項間の関係を意味づけるフレームに限定することで、フレーム意味論は字義通りの意味と比喩的な意味との間の関係を記述する手段にもなる。本稿では 2.3 節で示した Croft (2009) の手法に倣い、意味記述において追加が必要な意味要素があればそれを補完する。また、2.4 節で示した Sullivan (2013) のアプローチを採用し、「痛い」の多義性において比喩的な拡張に基づくと考えられるものはどの様に字義通りの意味と対応関係を結ぶか考察を加える。なお、参与項間の関係の詳細を記述する際には Langacker (2008) の認知文法における図式に倣ってモデルを示す場合があることをここで断っておく。

3. 分析

まず、分析の前提として、辞書における「痛い」の定義を導入する。

「痛い」(形)

①けがや病気で、からだの部分がつかなくて、がまんができなくなる感じだ。

「腹が痛い・頭を打って痛い」

②〔損害などをこうむって〕つらい。「痛いエラー」

③弱点をつかれて、まいった状態だ。「痛いところをつく・耳が痛い」

④〔俗〕ぶざまで痛々しいようすだ。「痛いギャグ」

(三省堂国語辞典 第七版)

先述の通り、「痛い」は感覚に関する意味だけではなく、②の語義の様に損害に関する意味、④の語義の様に人の評価や状態に関する意味を持つことが分かる。さて、このような語義であるが、現代日本語母語話者の直感的には①から②～④の各語義が派生したかのように思われる

ものの、精神的な苦痛に関わる意味に関しては古くから用例がある。上代の日本語では、「秋といへば許己呂曾伊多伎（こころそいたき）」⁹（吉田, 2000: 34）という様に精神的な苦痛を意味するものとして使用された例がみられる。この様に見ても、「痛い」は古くから痛覚のみならず、心の状態を表す意味も有していることが分かる。上記の例はあくまで先行研究において「痛い」が感覚形容詞と短絡的に分類されたことの反例を示す目的として示したものである。なお、意味変化の傾向、方向性としては具体的な領域の語が抽象的な領域の語へ拡張することが多い。

（cf. Sweetser, 1990: 27）そのため、「痛い」も身体的意味（具体）から精神的意味（抽象）へと拡張した可能性は考えられる。以下、本章では FrameNet ですでに構築されたフレームの定義に基づきながら、日本語形容詞「痛い」が現れた文を分析する。作業手順としては、観察対象の意味に近い英語が喚起するフレームが対象語と同様のものと考えられるかを観察する。

3.1. 身体的苦痛に関わる意味：足が痛い、痛い注射

上述した辞書的な定義①に近い意味での「痛い」は英語の *painful*, *be in pain* などの表現が近い。これらの単語は〈Perception_body〉フレームを喚起する。このフレームに従って分析を行う。フレームの定義は下記の通り：

(10) 〈Perception_body〉フレームの定義：

This frame contains words describing physical experiences that can affect virtually any part of the body. The Body part affected is almost always mentioned with these words. It is typically expressed by the noun heading the external argument, and this noun is typically accompanied by a possessive determiner that refers to the possessor of the Body part, as in the first example below:

(11) [BODY_PART My head] HURTS^{Target}!¹⁰ (FrameNet)

上記 (10) はフレームの定義であり、フレームを構成するフレーム要素間の関係やそれぞれのフレーム要素がどのような形で文中に具現化するかを示したものである。このフレームには、実際に身体部位に影響をもたらす身体的な経験を表す語が多く、コアフレーム要素である、

[BODY_PART]（身体部位）は外項として現れること、また所有限定詞を伴うことが多いといった特徴が書かれている。その特徴が現れたものが、(11) の例文である。また、文及び語の意味を理解をする上で欠かせない要素である、コアフレーム要素とその定義を示したものが表1である。そして語の理解への関与が随意的である、ノンコアフレーム要素を示したものが表2で

⁹ 万葉集 四三〇七首、大伴家持が七夕を詠んだもの。「秋等伊閑婆 許己呂曾伊多伎 宇多弓家 花仁奈蘇倍豆 見麻久保里香聞。」からの引用。なお、括弧内に示した読みは、吉田（2000: 34）からの引用である。

¹⁰ フレームの文へのアノテーションは、フレーム要素に対して角括弧と下付き文字にてフレーム要素名 [FRAME_ELEMENTS] を示す。フレーム喚起語は上付き文字にて ^{Target} の様に示す。web 上で当該のフレーム定義を参照すると、各フレーム要素には個別の色があてがわれ視覚的にフレーム要素が判別出来るが、本稿では代替として上記の様にフレーム要素を表示する。なおこの表記法も FrameNet に準ずるものである。

ある。例えばこのフレームでは、コアフレーム要素は [BODY_PART] (身体部位) 及び [EXPERIENCER] (経験者) などの要素が理解への関与が必須の参与項である。一方、[EXPLANATION] (痛みの原因)、[DEGREE] (程度) などは理解への関与が随伴的とされる。

要素名	コアフレーム要素定義
Body Part	This FE is the location on the body where the physical experience takes place, typically expressed as External Argument, often as PP complement
Experiencer	The Experiencer is the being who has a physical experience on some part of his or her body, or internally. Often information about this frame element is incorporated as a possessive determiner into the constituent expressing the Body Part, in which case it is not tagged separately (from Body Part), as shown below: <i>My legs HURT!</i> Sometimes, however, this frame element is expressed as an External Argument in its own right: <i>I HURT all over!</i> Here, the phrase <i>all over</i> can be considered a kind of generalized Body Part expression, and the pronoun <i>I</i> expresses the Experiencer independently. With nouns and adjectives in this frame, the separate expression of the Experiencer is more common: <i>I have a PAIN in my leg.</i>

表 1: 〈Perception_body〉フレーム コアフレーム要素

要素名	ノンコアフレーム要素定義
Degree	Degree to which event occurs
Explanation	The Explanation describes the cause of the perception the body is experiencing.
Manner	Manner of performing an action
Subregion	The [SUBREGION] is the specific area of the [BODY_PART] which experiences the sensation. [BODY_PART] My leg] ACHES [SUBREGION under the bandage].

表 2: 〈Perception_body〉フレーム ノンコアフレーム要素

上記のフレームの定義、及びフレーム要素の定義に従って、日本語書き言葉均衡コーパスからコーパス検索アプリケーション『中納言¹¹』を利用し採取した用例にアノテーションを施す。語彙素の検索条件に「痛い」を入れ日本語書き言葉均衡コーパスより採取可能な例は 6,236 件である。全件に対するアノテーションは施さず、コーパスから観察可能な「痛い」の多義的意味すべてを観察する上での代表例を示している。

(12) [EXPLANATION 長時間自転車に乗っていたので][BODY_PART お尻が]痛い^{Target}です。

(OC14_09279) ¹²

¹¹ コーパス検索アプリケーション中納言 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

¹² 日本語書き言葉均衡コーパスからの用例は例文末尾に ID を付与している。なお、例文に対するフレーム要素のアノテーションは筆者によるものである。

- (13) 脱色してもその下から、すぐに濃い毛は生えるし[EXPLANATION ワックスは]痛い^{Target}し、しかも、脱毛ってお金がかかるし・・・ (OC09_07853)

(12) の様な叙述用法は特に多く、痛みを感じている身体部位がガ格名詞として現れることが多い。また、この例においては痛みの原因（長時間自転車に乗っていたこと）が文中に現れている。次に (13) の例をみよう。これは主題化された名詞「ワックス」に [EXPLANATION]（痛みの原因）というフレーム要素名が付記されている。これは感覚（感情）形容詞の属性的な用法（e.g. 寂しい秋）とされるものである。ワックスは痛い」という文の解釈を考えると、「ワックスを使用して脱毛すると、使った人の脚、腋などが痛くなる」というものであり、理解においては、文中に現れない要素も関わっている。〈Perception_body〉フレームのコアフレーム要素は経験者とその人から分離不可分な要素である身体部位がコアフレーム要素となり、痛みを与える原因となる要素などはノンコアフレーム要素である。感情（感覚）形容詞の属性的な用法は、コアフレーム要素ではないものが際立った結果、形容詞により修飾される要素（ガ格名詞句や限定用法の主要部名詞）に現れたものであると考える。Langacker (2008) の行為連鎖モデルを参考に参与項間の関係を図示すると次の様になる。

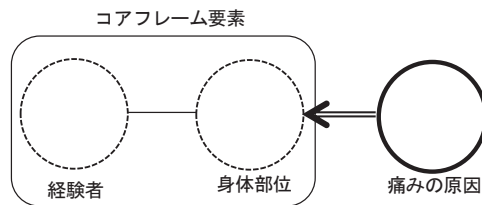


図 4: 「ワックスは痛い」の認知図式¹³

上記図 4 の円はフレームの参与項（フレーム要素）を示す。なお、経験者と身体部位の間を結ぶ直線は両者が連続的（分離不可分）であることを示すものである。そして、痛みの原因から出る矢印は影響の方向性を示したものである。通常、痛みを与えるものが作用して経験者の身体部位に痛みを発生させるため、それを示したものである。なお、図の参与項を示す円の太さの違いは認知的な際立ちの違いを示している。篠原（2019: 135-136）はこのような事例を原因と結果のメトニミーと説明する。フレーム要素に基づきながら参与項間の連鎖関係を図式することで、篠原（2019）の説明を補強し得ると考える。なお、ここで用いた説明は「一はーが」構文、いわゆる象鼻文にも有効である。次の例を見よう。

¹³ Langacker (2008: 355-356) の行為連鎖モデル (action chain model) を参考にした。本稿で用いたノンコアフレーム要素が際立つことが感覚形容詞の属性的用法の認知的な基盤であるという説明は他の感情形容詞による属性的な叙述（e.g. 秋は寂しい）といった表現にも応用可能であると考えている。

- (14) [EXPERIENCER 田村は][BODY_PART 頭が]痛く^{Target}なったが、我慢しながらろうじて立っていた。
(LBj7_00045)

上記、(14) は主題として経験者である「田村は」が、身体部位として「頭が」が現れている。話し手から観て、対象が単に痛そうにしているのであれば、「田村は痛そうだ」などの表現を用いる。しかし、(14) では身体部位への言及が為されている。このような文が用いられる場合、特に痛そうにしている箇所に焦点が当たっていると考えられる。

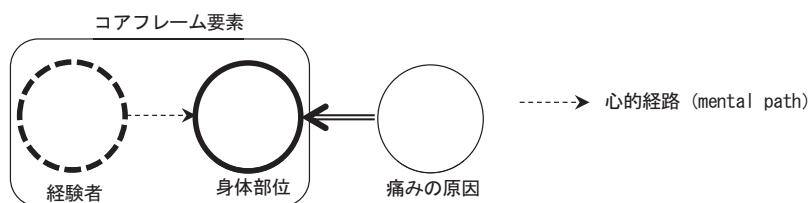


図 5: 「田村は頭が痛い」の認知図式

(14) の例では文中要素に (13) で見たような痛みの原因となる要素が具現化していない。一方で、主題に経験者、ガ格名詞に身体部位が生起する。この時最も認知的に際立つものは身体部位という項であり、準じて経験者が際立つと考えられる。言語の線形順序を考慮すれば、経験者である「田村」から身体部位である「頭」へとプロファイルがシフトしていると考えられるため参与項の間には認知的な際立ちが生じていると分析した。これを図式化したものが図 5 である。破線矢印は心的経路を示し、全体から部分への変遷を示している。図の太線と太破線の差は際立ちの差であり、太線が最も際立つもの、準じて際立つものを太破線で示したものとする。なお、身体部位を際立たせる必要がなければ「田村は痛そうだ」などの競合する表現が選ばれるが、身体部位を文中成分として具現化している以上、要素間に際立ちの差があると考えerことは妥当であるように思われる¹⁴。フレーム意味論では、参与項の認知的な際立ちの差異に関する言及は少ないため、認知文法的なアプローチを援用することで、参与項間の際立ちの差と構文の選択を説明できると考えられる。

3.2. 身体的苦痛のメトニミーとしての精神的苦痛を表す慣用表現：耳が痛い、胃が痛い

次に、身体的苦痛に関わる意味のメトニミー的な表現としての精神的苦痛を示す意味を観察する。ここで挙げる例はガ格名詞が形容詞「痛い」の項となるものとして分析可能なもの、または「X が痛い」でひとまとまり性を持った慣用的表現であると分析可能なものが含まれる。

¹⁴ Langacker (1991: 348-349) ではレイセーニョ語における二重主語構文について論じており人—身体部位の関係が認められる文を扱い、両者に際立ちの差はないとする。また、Kumashiro (2016: 183) では日本語の [N¹ が N² が A] といった構文を扱い、N¹ と N² の間に分離不可分な関係があるものにおいて、各要素がどのようにプロファイルされているか論じているが、要素間の際立ちの差はないものとして図示している。象鼻文などにおいて各要素間に際立ちの差が生じているかという問題に関しては今後の課題としたい。

- (15) [BODY_PART 耳が]痛い^{Target}のってもしかして中耳炎になってるのでは？ (OC09_11511)
- (16) いろいろ地元きょうも陳情に来ておりましたが、これは建設省に耳が痛いと思うのですけれども、あの長良川の堤防の決壊は、決して偶然な天災 (OM12_00003)

上記 (15) と (16) を比較する。(15) は後文脈に「中耳炎」とあることから、実際の耳の痛み、身体的苦痛に関わる意味であることがわかる。そのため、「痛い」は〈Perception_body〉フレームを喚起し、そのフレームによって意味の理解が支えられていると考えられる。一方、(16) の例では「痛い」は身体的な苦痛に関わる意味ではない。そして、「耳が痛い」がひとまとまりで、一つの語彙として機能していると考えられる。根拠としては、痛みの様態を示す表現をガ格名詞と形容詞の間に共起できるかどうかによって示される。

- (17) [BODY_PART 耳が][MANNER ズギズギと]痛い^{Target} のってもしかして中耳炎になってるのでは？
- (18) * いろいろ地元きょうも陳情に来ておりましたが、これは建設省にとって耳がズギズギと痛いと思う。

「ズギズギと」の様な様態を示すものは〈Perception_body〉フレームのノンコアフレーム要素である。そのため、(17) の様に実例 (15) に対して様態を示す句を挿入しても表現の自然さは保たれる。一方で、実例 (16) に対して (17) と同様の操作を行った (18) は不自然な表現となる。これは (16) における「耳が痛い」は一つの語彙として機能していること、また喚起するフレームが異なっていることの一つの証左であると考えられる。類例はほかにも存在するが、下記の様な例は身体的な苦痛と精神的な苦痛とが近接関係にあることを示す例である。

- (19) (a) 正直に言えば、不安で胃が痛い (OY05_05572)
- (b) 正直に言えば、不安で胃がキリキリと痛い。
- (20) (a) そういう目にあった人の気持ちを考えると胸が痛い (OC10_01871)
- (b) ?そういう目にあった人の気持ちを考えると胸がキリキリと痛い

上記 2 ペアの例は「胃が痛い」「胸が痛い」という表現が精神的な苦痛を示す表現であるとともに、実際に身体部位に痛みが発生しているという解釈も可能な表現である。そのため、(19a) の表現に「胃が痛い」ことを修飾する様態副詞「キリキリと」をガ格名詞と形容詞との間に共起させた (19b) には (17) の様な不自然さは生じない。この様な例の場合には身体的苦痛と精神的苦痛が同時発生し得るという点で、概念的、または時間的な近接性があるメトニミー表現の一種であると考えられる。(20a) (20b) の例も同様であるが、(20b) は僅かに不自然にも感じられる。身体的な苦痛を実際に伴う場合には、〈Perception_body〉フレームが理解を下支えする。一方、実際に身体的な苦痛が発生してない場合には〈Emotions_by_stimulus〉フレームがひとまとまり性のある表現によって喚起されていると考えられる。このフレームの

定義は次の様なものである。なお、フレーム要素の定義に関してはここでは割愛する。

- (21) 〈Emotions_by_stimulus〉フレームの定義：

An EXPERIENCER, EXPRESSOR, EVENT, or STATE has an emotion as brought on by an STIMULUS or TOPIC. (FrameNet¹⁵)

- (22) コアフレーム要素：

[EXPERIENCER] (経験者)、[EXPRESSOR] (表出方法)、[STATE] (状態)、
[EVENT] (事態)、[STIMULUS] (刺激)、[TOPIC] (話題)

ノンコアフレーム要素：

[CIRCUMSTANCES] (状況)、[DEGREE] (程度)、[MANNER] (様態)、
[EMPATHY_TARGET] (経験者)、[EXPLANATION] (説明)

上記の定義に従い、実例に対しアノテーションを施すと次のようになる。

- (23) [TOPIC これは][EXPERIENCER 建設省に]耳が痛い^{Target}

- (24) (精神的苦痛) 正直に言えば、[STIMULUS 不安で]胃が痛い^{Target}
(身体的苦痛) 正直に言えば、[EXPLANATION 不安で][BODY_PART 胃が]痛い^{Target16}

なお、2 つのフレームの両方が理解を支える場合も考えられる。つまり字義通りの意味と比喩的表現が折り重なりあい、状況や話し手の状況や感情、精神的状態を伝達していると考えられる。また、文脈から、確実に身体的な苦痛が発生していないと考えられる様な例も存在する。

- (25) (a) アルバイトの入金はかなり後になった。頭が痛い (OY14_01301)
(b) *アルバイトの入金がかなり後になった。頭がガンガン痛い

(25a) における「頭が痛い」は経験者が特定の状況に対して不都合に感じているさまを示す表現である。無論、「頭が痛い」によって実際の痛みを示す場合もあるが、(21b) の様に頭の痛みの様態を示す際に用いられる「ガンガン」といった様態副詞を伴うと不自然な表現となる。

¹⁵ <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/frameIndex> [2019/7/8 閲覧] なお、STIMULUS 前の前置詞 *an* は原文ママ。なお、フレームの定義において修正すべき箇所があるように思われる。例えば定義では STATE や EVENT も感情を持ちうる対象となっているが、EVENT の場合は感情を呼び起こし得る対象であるため、STIMULUS と同様の要素であると思われる。ただし、フレームの定義の是非に関しては本稿では議論の対象としない。

¹⁶ ここでは痛みの原因を EXPLANATION とアノテーションを行ったがこれはあくまで STIMULUS といったフレーム要素を持たない 〈Perception_body〉フレームに準じてアノテーションを行ったためである。痛みの原因＝刺激が必ず「痛い」という語の理解に関わる要素であることが証明できる場合 〈Perception_body〉フレームを継承したサブフレームを仮定し、フレーム要素の記述を行う必要もあるが、その点については他稿に譲る。

この場合には身体的な苦痛と精神的苦痛との間の近接性は乏しく隠喩的な表現であると思われる。先述の(16)における「耳が痛い」も同様である。身体的苦痛に関わるフレームと、精神的苦痛に関わるフレームの関係に関しては3.3節にて詳しく論じる。

3.3. 精神的苦痛：心が痛い、痛い記憶、痛い一言

3.2節では精神的苦痛に関わる慣用表現「耳が痛い」、「胃が痛い」などを観察した。そして中には、実際に身体的苦痛との近接関係にあるものも観察された。ここでは「痛い」単体で精神的苦痛を示す表現を観察する。外界からの刺激によって心内に引き起こされた反応、感覚を表すことから、〈Emotions_by_stimulus〉フレームが理解に関わると考えられる。この時、フレーム間の対応関係は Sullivan (2013) が指摘するような起点領域から目標領域に対する写像が行われていると考えられる。つまり、身体ドメインを構成する複数のフレームの内の一つである〈Perception_body〉フレームが、精神ドメインに写像された結果、〈Emotions_by_stimulus〉フレームへと変化していると考えられる。そのため、各フレーム要素にも対応関係が観られる。ただし、既存の〈Emotions_by_stimulus〉フレームには観られない要素が写像により追加されていると考えられるものがある。それは「心が痛い」というような表現に見られる「心が」といった要素である。これは起点領域となる〈Perception_body〉フレームにおける身体部位に関わるフレーム要素が写像された結果であると考えられる。Sullivan (2013) を参考に図で示すと図6のようになる。

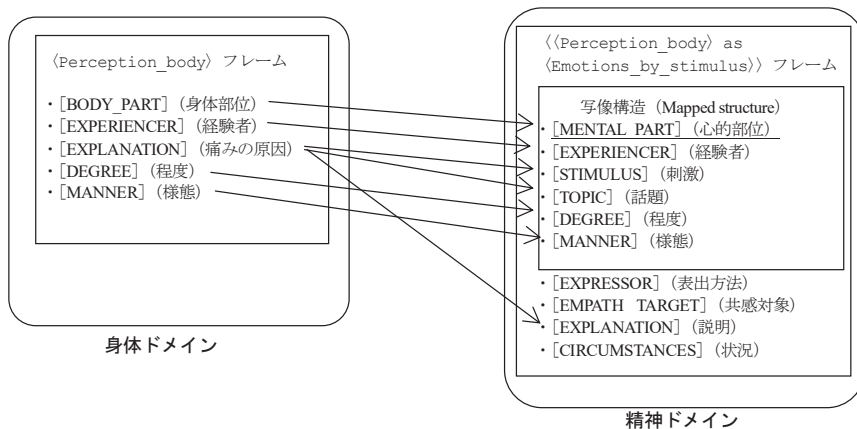


図6: 〈Perception_body〉〈Emotions_by_stimulus〉フレーム間の写像関係

3.2節、(22)で挙げた様に、〈Emotions_by_stimulus〉フレームには身体部位に相当する要素が存在しない。しかし、実際には「心」「記憶」「気持ち」といった、心的要素と考えられる要素が文中に現れる。したがって、これをフレームの写像によって生まれた意味的項として扱い、便宜的に[MENTAL_PART] (心的要素)とし、理解に関わるフレームを

〈〈Perception_body〉 as 〈Emotions_by_stimulus〉〉 フレームと呼称する。このフレームの定義を (26) に、そしてフレーム要素を (27) に示す。

- (26) 〈Perception_body〉 as 〈Emotions_by_stimulus〉 フレーム定義¹⁷ :

This frame contains words describing psychological experiences that can affect virtually any part of the mind. An EXPERIENCER, as an emotion as brought on by a STIMULUS, EVENT, or STATE or TOPIC. An EXPERIENCER's emotion may be expressed by EXPRESSOR. An EXPERIENCER's MENTAL PART can also be affected by STIMULUS, EVENT, or STATE or TOPIC.

- (27) コアフレーム要素 :

[EXPERIENCER] (経験者)、[EXPRESSOR] (表出方法)、[STATE] (状態)、
[EVENT] (事態)、[STIMULUS] (刺激)、[TOPIC] (話題)、[MENTAL_PART]
(心的要素)

ノンコアフレーム要素 :

[CIRCUMSTANCES] (状況)、[DEGREE] (程度)、[MANNER] (様態)、
[EMPATHY_TARGET] (経験者)、[EXPLANATION] (説明)

この定義とフレーム要素に従って、実例に対してアノテーションを施す。

- (28) [MENTAL_PART心が]ちくちくする^{Target}。あらまあ大変、だー[DEGREEものすごく][MENTAL_PART心が]痛い^{Target}。これって罪悪感? (PB29_00161)
- (29) 歌手チョンジン (本名パク・チュンジェ) が放送で[EXPLANATION実母に対する]痛い^{Target}[MENTAL_PART記憶]に対してもう一度口を割った (OY04_03607)
- (30) そしてその時にママ達からいた一い^{Target}[STIMULUS一言]。 (OY15_08044)

(28) におけるガ格名詞「心が」は心的要素を表す語である。類語である「気持ち」なども同様の意味役割を担うことが想定されるため、同様のアノテーションが可能であると思われる。また、この文の前文脈を見ると「心がちくちくする」という表現がある。「ちくちくする」という擬態動詞 (mimetics verb) は特定の痛みを示す表現 (e.g. 指に刺さった棘がちくちくする) として使われるものである。これは、身体的苦痛の理解を支える体系的知識が、精神的苦痛を表すための知識として援用されており、構造的な対応関係の存在の証左と言えよう。なお、「ちくちくする」という表現も 〈〈Perception_body〉 as 〈Emotions_by_stimulus〉〉 フレームによって理解が支えられる表現である。(29) において「痛い」によって限定修飾されている名詞「記憶」も心的部分と言える。次に、「痛い」という感情、感覚を与える源泉もまた文中に

¹⁷ FrameNet に所収されたフレームではなく、本稿にて指定したフレームである。そのため、フレーム定義は 〈Emotions_by_stimulus〉 フレームを基盤にしつつ定義を定めた。そのため、本フレームでは STATE や EVENT を感情を与える要素と修正して記述している。(本稿、脚注 15 参照)

現れる例を見よう。(30)における「一言」は外部から与えられた精神的な苦痛の源泉である。そのため、[STIMULUS] (刺激) という意味役割を担うと考えられる。先述の通り、精神的な苦痛を示す「痛い」は古くから用例があるため、身体的な苦痛を示す表現とどちらが先にあったかという議論には踏み込まないが、具体的表現から抽象的表現へ拡張するといった意味変化の傾向に従うのであれば、本節で観察したようなフレーム間の写像関係があることが推測される。

3.4. 金銭的損失：痛い出費、財布に痛い

本節では金銭的損失に関わる「痛い」を見たい。多くの場合、損失額の大きさを示すために使われる表現である。類義語となり得るのは「高い」であり、「痛い」を「高い」に置換しても意味は大きく変わらない。このことから英語 *expensiveness* が喚起するフレームと同様のフレームによって金銭的損失に関わる「痛い」の理解が支えられると考える。したがって、この場合の「痛い」は〈Expensiveness〉フレームを喚起するものとする。

(31) 〈Expensiveness〉フレーム定義：

A PAYER gives up (or potentially gives up) the use of an ASSET (generally money) in order to achieve an INTENDED_EVENT. This event is often more specifically described as gaining possession of some GOODS or receiving a SERVICE. In the majority of cases, the PAYER is described generically (INI¹⁸), and the situation depicted answers the question of how much of an ASSET would have to be given up to receive the GOODS or bring about the INTENDED_EVENT. (FrameNet¹⁹)

(32) コアフレーム要素：

[ASSET] (金額)、[PAYER] (支払い人)、[GOODS] (商品)、
[INTENDED_EVENT] (支払い対象となる事態)

ノンコアフレーム要素：

[DEGREE] (程度)、[ORIGIN] (購入元)、[TIME] (時間)
[RATE] (割合)

上記の定義に従って、実例に対してアノテーションを施す。

(33) やっぱ、[TIME この不況時期][ASSET 十萬円の支出は]痛い^{Target}わ〜 (OY05_07126)

(34) バッテリー代の¥一万五千五百二十五だけ支払って来ました。

[DEGREE ちょっと]痛い^{Target}[ASSET 出費]?!でしたけど (OY14_27033)

¹⁸ INI (indefinite null instantiation)。フレーム意味論では、文中に現れない成分であっても、理解に関わる項目がどのような形で省略されているかを記載する。INIはそのうちの一つであり、例えば I've already eaten の様な表現では、何を食べたかがそこまで重要ではないが、その存在は確実に理解に関わる。一方何が省略されたかが話し手と聞き手で確実に理解できるものは DNI (definite null instantiation)

¹⁹ <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/frameIndex> [2019/7/8 閲覧]

この通り、金銭的な損失に関わる「痛い」に関しては多くの場合 [ASSET] (金額) が文中要素として現れることが多く、(31) の定義にもあるように、[PAYER] (支払い人) の存在は確実に理解に関わるものの、文中には共起しない。例文 (33) に関しても、話し手が [PAYER] (支払い人) であり、自分が支払った [ASSET] (金額) に対する表現であり、文中の要素として支払人自身を示す語は現れていない。また、(34) で見るように、「ちょっと」のような程度性に関わる副詞も共起可能である。ここでも身体的苦痛または精神的苦痛が意味的な基盤である場合、フレーム要素間には対応関係がみられる。図7では身体的苦痛に関わる意味からの写像を想定したモデル化だが、精神的苦痛な意味が写像の起点領域となる場合には、図6と図7を合成したようなモデルを想定する必要がある。なお、図7では元の [BODY_PART] (身体部位) が写像された結果を [PROPERTY] (財源) とした。この要素は既存の〈Expensiveness〉フレームには無いが、〈Perception_body〉フレームが写像されたことによって生じた意味理解に関わる要素であると考えられる。このような規定が必要なのは次のような例によって示される。

- (35) 残業も無くなってしまったので_[PROPERTY]懐的には_[DEGREE]かなり_[Target]痛い_{です}けどね
(OY15_17776)

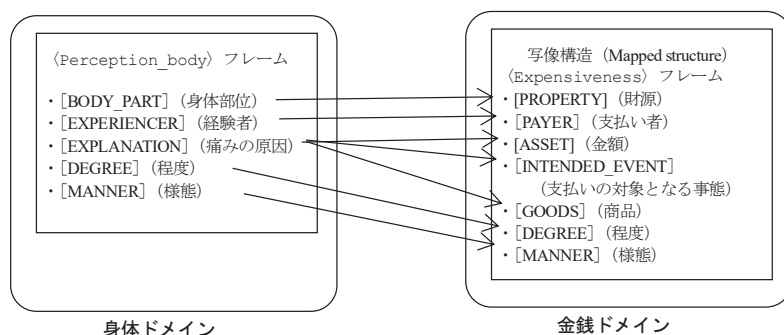


図7: 〈Perception_body〉〈Expensiveness〉フレーム間写像関係

「出費が痛い」の様に損失を示す語をガ格名詞でとることが多いが、財源を示す名詞は「懐に痛い」「財布に痛い」「家計に痛い」という様に、二格をとって現れることがある。この場合には「痛い」の根源的意味である身体的苦痛が身体部位に生じるという構造が写像されたことにより、「出費が財布に痛い」という表現のように支払う金額の出どころ (財源) となる名詞を取った表現が共起可能になっていると考えられる。つまり、「辛い食べ物がのどに痛い」といった場合にガ格名詞には〈Perception_body〉フレームのフレーム要素 [EXPLANATION] (痛みの原因) に相当する名詞が現れ、二格名詞には痛みの発生している箇所である [BODY_PART] (身体部位) を表すものが生起する。図7でも示したように、写像において [EXPLANATION] (痛み

の原因)に相当する〈Expensiveness〉フレームのフレーム要素は[ASSET](金額)などであり、[BODY_PART](身体部位)に対応するのが[PROPERTY](財源)である。そのため出費、損失を示す要素がガ格名詞に現れ、損失によって害を被る要素がニ格名詞で現れる。この関係性は身体的苦痛と似た構造となる。以上のように、フレーム、及びフレーム要素単位で観察することは、概念構造の要素が写像され、写像された後どのような意味的な役割を担うのか、またどのような文法的性質が引き継がれるかといった点を観察するうえで有益である。

3.5. 金銭に限らない損失：戦死が痛い、痛い負け越し

次に、金銭に限らない損失に関わる「痛い」を観察する。共起する名詞は「戦死」「負け越し」など、ネガティブな感覚、感情をもたらす事態名詞である。3.3 節で観察したものと同じく、外部からの刺激や事態に対する反応として「痛い」と感じる、または判断している表現である。そのため、〈〈Perception_body〉 as 〈Emotions_by_stimulus〉〉フレームであると言える。証拠として (35a) の実例に対して、心的部位を補完した (35b) は自然な表現である。

- (36) (a) 盛田飛曹長が隊長代行とはな。[EVENT 玖永大尉が戦死したのが]痛い^{Target}よ
 (b) [EVENT 玖永大尉が戦死したのは][MENTAL_PART 心が]痛い^{Target}よ (PB49_00471)
- (37) 打線は結局4安打に終わり、最下位楽天に痛い^{Target} [EVENT 負け越し]で5位に転落・・・
 ついに単独5位に転落… (OY15_08227)

なお、ここで観察しているフレームやフレーム要素のアノテーションは「痛い」の理解に関わるものである。そのため、(35)におけるガ格で取る節「玖永大尉が戦死した」を一つの節として、この述部である戦死の喚起フレームを観察する場合には他のフレームが理解に関わる。(36)も同様であり、「負け越し」のフレームが理解に関わる²⁰。

3.6 人物の評価：痛い人、痛い子

比較的新奇性の高い「痛い」の意味を本節で観察する。英語で最も近い表現としては俗語的ではあるものの、動詞 *cringe* を元にした形容詞 *cringy* である。「目にするのも恥ずかしい、見ていられない様」を示す表現である。日本語での似た表現としては感情形容詞における「恥ずかしい人」といったものだろう。この意味での「痛い」の例には次のようなものがある。

- (38) 赤ワインで出来てると本人が言って自慢してましたから。久々に痛い人見たよ (笑)
 (OC01_03730)
- (39) 読まないでください！判断は各自でお願いします！そうですね…私が痛い子なのは今に始まったことではない 少々の痛さには免疫が (OY14_28532)

²⁰ 「戦死」であれば〈Losing_someone〉フレーム、「負け越し」は〈Finish_game〉フレームが理解に関与すると考えられる。

修飾しているのは「人」「子」と人物名詞である。(37)の様に、自分の状況に気付いていないことは、この意味における「痛い」の意味的な特徴の一つである。また、(38)の場合には自分自身のことに言及して「私が痛い子」と述べているが客観的に自己を観察した場合に「痛い」ことを認めている言及である。つまり、自己を分裂 (split) させて捉えたメタ認知的な概念化が反映されていると思われる。この意味の理解を支えるフレームは評価者と評価の対象者が意味的なフレーム要素に含まれる〈Disgraceful_situation〉フレームであると考えられる。

(40) 〈Disgraceful_situation〉フレームの定義：

An implicit cognizer judges that a particular STATE_OF_AFFAIRS for which a PROTAGONIST is responsible is socially unacceptable. (FrameNet²¹)

(41) コアフレーム要素：

[PROTAGONIST] (対象者)、[STATE_OF_AFFAIRS] (事態の状態)²²

ノンコアフレーム要素：

[DEGREE] (程度)、[EXPLANATION] (説明)、[JUDGE] (判断者)

上記のフレームと身体的苦痛の意味を支えるフレームとの間にどのような対応関係があるか考えてみたい。[EXPERIENCER] (経験者) に関しては写像される際に、[PROTAGONIST] (対象者) [JUDGE] (判断者) の両方と対応関係を持つと思われる。ただし、先述の通り、この意味を理解する上で喚起されるフレームは一つに留まらないと考えられる。評価を行う側の人物が視点を投影した場合、自分であればその状況を我慢できないと感じること、それに加え、評価を受ける側の人物に自覚がないこと、といった複雑な意味的要素が重なりあい、「痛い」の新奇な意味が成り立っていると考えられる。そのため、もう一つ理解に関与するフレームがあると措定する。〈Others_situation_as_stimulus〉フレームは他者が置かれている状況を自分自身の感情を引き起こす刺激となる場合に使われる表現の理解に関与するフレームである。このフレームの定義は次のようなものである。

(42) 〈Others_situation_as_stimulus〉フレームの定義：

An EXPERIENCER feels an emotion as evoked as an OTHER. (FrameNet²³)

(43) コアフレーム要素²⁴：

²¹ <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/frameIndex> [2019/7/8 閲覧]

²² [PROTAGONIST] (対象者) の定義は “The person or organization responsible for the occurrence of the State_of_affairs.”、[STATE_OF_AFFAIRS] (事態の状態) は “The entity or event which brings disgrace upon the Protagonist.” と定義される。

²³ <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/frameIndex> [2019/7/8 閲覧] なお、フレーム名の Others はアポストロフィが無いが、フレームの定義から考えても、実際の意味は Other's の意味である。データ処理上の問題でアポストロフィをフレーム名に利用することを避けたものと思われる。

²⁴ ノンコアフレーム要素については割愛する

[EXPERIENCER] (経験者)、[OTHERS] (他者)、[SITUATION] (状況)

このフレームが理解に動員されることで、「痛い」の意味がどの様に成立するかを詳細に記述、分析することが出来る。身体的苦痛に関わるフレーム、評価に関するフレーム、そして他者の状況に対する感情に関わるフレームの対応関係を示すと図8のようになる。

以上の分析に基づいてフレーム要素のアノテーションを施したものが (44) (45) となる。アノテーションが複層的になっているのは、先述の議論を踏まえたためである。

(44) 赤ワインで出来てると本人が言って自慢しましたから。

久々に痛い^{Target}[PROTAGONIST/OTHERS 人]見たよ (笑) (OC01_03730)

(45) 読まないでください！判断は各自でお願いします！そうですね…

[PROTAGONIST(OTHERS)/JUDGE(EXPERIENCER) 私が]痛い^{Target}[PROTAGONIST 子]なのは今に始まったことではない 少々痛さには免疫が (OY14_28532)

なお、上記の意味と同様の意味であり、特に「オタク²⁵らしさ」に関わるものを示す形態素に変化した用法もある。これについては次節で観察する。

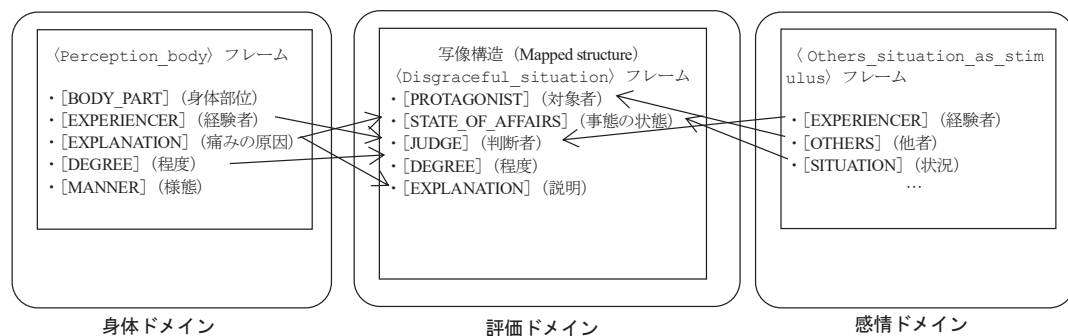


図 8.3 フレーム間の対応関係

3.7. 複合語を生産する形態素としての「痛 (いた)」：痛車、痛ンブラー

3.6 節で観察した意味に関連して「痛い」の語幹が複合において、特定の意味を添加する形態素となっている例を示す。なお、フレームに関しては述語ではないため、文の要素の理解を支配するフレームとはならないが、複合語内の後続の要素との意味関係は形容詞 (語幹) のフレームによって理解できる。フレームに関しては 3.6 節と同様であるが、本人の自覚の有無などは特に理解に関与しないため、喚起フレームは <Disgraceful_situation> フレームと考えられるだろう。なお、例文 (46) においてはアノテーションを行った文の前文脈に、造語の成り立ちの説明もふくまれている。

²⁵ アニメや漫画など、特定の対象について非常に詳しくそれを愛する人を示す意味でのオタクである。

- (46) その手に光るのは「痛い+タンブラー=痛ンブラー」。痛^{Target}[STATE_OF_AFFAIRンブラー]は、スターバックスの「クリエイト ユア タンブラー」にアニメ絵などを入れて自分たちで楽しもうという、たぶんそういう感じのムーブメントです (OY14_12903)
- (47) ちなみに同じ痛^{Target}[STATE_OF_AFFAIR車]の初音ミクは十八位完走だそうです・・・ (・∀・) イイネ!! (OY15_13133)

前節の意味と類似としたが、(46) (47) の例を見る限り、アニメや漫画のキャラクターの絵や意匠をこらすなどの特定の意味として定着していると思われる。例えば「痛スーツ」というと時代遅れなどの意味ではなく、アニメのキャラクターなどを裏地などにあしらったスーツとなる。このように限定した意味において「痛+名詞」は生産性の高い形態素であると言える。

3.8. 強調詞としての「痛く」：痛く思い知らされる、痛く感心する

最後に、吉田 (2000) も指摘していた他の語の程度性を高める強調詞としての用法について観察する。次の例をみよう。

- (48) 救国のために走り回っている図が、山南にはわが事のように痛く思い知らされた。焦燥感を募らせた。 (LBn2_00040)
- (49) として新陰流の形を上覧に供したが、義輝は、その妙技に痛く感心し、次のような感状 (表彰状) を与えた。 (LBr7_00047)

(48) の例では「思い知る」の副詞としてネガティブな意味の程度性を強める働きがある。一方 (49) では「感心する」の副詞としてポジティブな意味の程度性を強めている。このことから、「痛く+述語」における連用形副詞法での「痛く」はネガティブな意味、ポジティブな意味のどちらも修飾し、程度性を強める強調詞としての用法があることが分かる。なお、この意味でのフレームは〈Degree〉フレームとなる。ただし、意味の変化においてネガティブーポジティブという極端を持つスケールにおいて、ネガティブな意味を持つ語のスケール性が抽象化され、単に程度性を示す表現になっている点は特徴的である。否定的な語から強調詞へと変化した例は「いたく」「凄い」「やばい」など日本語でも例が観察される。阪口 (2013) ではスケール性の極性を捨象して抽象的な程度性を取り出す認知的操作を絶対値化と呼びモデル化しているが、この「痛く」もこの理論によって説明できると考えられる。

4. おわりに

本稿では、日本語形容詞「痛い」の多義性を探るべく、フレーム意味論を導入し意味の分析を行った。これまでの日本語形容詞の意味に関する研究は複数の意味的タイプを措定しそこに各語を分けていく点で極小主義的な意味分類を行っていた。フレーム意味論はそれに対し、意

味の異なり、参与項間の異なりや参与項間の関係性の異なりを詳細に記述することで、語の意味理解を詳細に分析することのできる、いわば意味の極大主義的アプローチである。この理論に基づき、「痛い」の意味の豊富さを記述した。本稿では「痛い」の意味の理解には6種類の異なるフレームが関与していることを示した。特に根源の意味となる身体的苦痛を表す意味の理解に関わる〈Perception_body〉フレームが他のドメインに写像されることにより、精神ドメイン、金銭ドメイン、評価ドメインなどが本来持たない意味要素が文中に現れることを確認した。以上を通し、本節ではフレーム意味論の意味分類分析における優位性、フレーム意味論と概念写像理論の統合的な説明である Sullivan (2013) のアプローチが日本語の比喩的表現の説明にも応用可能であることを示した。また、認知文法の説明を応用し3.1節では感覚(感情)形容詞の属性的用法について、フレーム内の参与項の際立ちの差という側面からフレームの定義の精緻化の可能性を探った。今後の展望としては、本稿で採用した分析手法、フレーム意味論及び認知文法の側面から、より多くの語彙を観察、分析し、日本語形容詞の属性形容詞と感情形容詞はどの様に参与項が異なるのか、また参与項間の関係は異なるのか、両者は根本的にどのように異なるのかという問題に取り組みたい。本稿のアプローチに基づく以上、属性形容詞、感情形容詞というカテゴリを立てるのではなく、意味的な参与項と形容詞との関わり合いの差異を指摘しつつ、ある語彙のそれぞれどの用法が属性叙述的である、または感情描写的であるといった記述を行うこととなる。

参考文献

- Croft, W. A. (2009) Connecting frames and constructions: A case study of *eat* and *feed*. *Constructions and Frames*, 1(1): 7-28.
- Dixon, R. M. W. (1977) Where have all the adjectives gone? In Dixon (1982) *Where have all the adjectives gone?: and other essays in semantics and syntax*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Fillmore, C. J. (1982) Frame semantics. *Linguistics in the morning calm*, 111-137.
- Fillmore, C. J. (1985) Frames and the Semantics of understanding. *Quaderni di Semantica* 6(2): 222-254.
- Fillmore, C. J., & Baker, C. F. (2001) Frame semantics for text understanding. *Proceedings of WordNet and Other Lexical Resources Workshop*, NAACL.
- Fillmore, C. J. & Baker, C. (2009) A frames approach to semantic analysis. In Heine, Bernd and Narrog, H. (Eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*, 313-339. Oxford: Oxford University Press.
- 藤井聖子・小原京子 (2003) 「フレーム意味論とフレームネット」『英語青年』149(6): 373-376.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』, 東京: 東京大学出版会
- Kumashiro, T. (2016) *A cognitive grammar of Japanese clause structure*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 黒田航 (2018) 「意味の社会性を意識した動詞の分類とその理論的含意」. 『日本認知科学会第35会大会発表論文集』, 602-611

- 今野弘章 (2012) 「落ち: 形と意味のインターフェイスの観点から」 『言語研究』 141 : 5-31.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, Volume 2, Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lakoff, G. (1993) Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony (Ed.), *Metaphor and Thought*, 2nd, 202–251. New York: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」 『言語研究』 144 : 29-53.
- 村上佳恵 (2013) 「感情形容詞の使用実態: 属性形容詞との対比を通して」 『学習院大学国語国文学会誌』 56 : 75-60.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究: 国立国語研究所報告: 44』 東京: 秀英出版.
- Ruppenhofer, J., M. Ellsworth, M. R. L. Petruck, C. R. Johnson, C. F. Baker & J. Scheffczyk (2016) *FrameNet II: Extended theory and practice*. Berkeley, California: International Computer Science Institute.
- 阪口慧 (2013) 「日本語形容詞「やばい」の意味拡張と強調詞化に関する一考察: 認知言語学から観る意味の向上のメカニズム」 『言語情報科学』 13: 19-35
- 篠原俊吾 (2002) 「「かなしさ」「さびしさ」はどこにあるのか」 西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』 東京: 東京大学出版会
- 篠原俊吾 (2019) 『選択の言語学—ことばのオートフォーカス』 東京: 開拓者
- Sullivan, K. (2013) *Frames and constructions in metaphoric language*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Sweetser, E. (1990) *From etymology to pragmatics*. New York: Cambridge University Press
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から』 東京: ひつじ書房.

辞書

- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大 (編) (2014) 『三省堂国語辞典』, 第七版. 東京: 三省堂
- 辻幸夫 (編) (2013) 『新編 認知言語学キーワード辞典』 東京: 研究者
- 吉田金彦 (編) (2000) 『語源辞典—形容詞編』 東京: 東京堂出版

使用コーパス及びweb上の語彙情報資源

- 国立国語研究 「日本語書き言葉均衡コーパス」 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
[2019年4月 アクセス]
- International Computer Science Institute, FrameNet. <https://framenet.icsi.berkeley.edu/fndrupal/>
[accessed July 2019]

A Frame Semantic Approach to the Polysemy of *itai* (be in pain)

Kei SAKAGUCHI

keisakaguchi24@gmail.com

Keywords: adjectives, frame semantics, polysemy, semantic classification, maximalism

Abstract

The aim of this paper is to analyze the polysemy of the Japanese sensory adjective *itai* (roughly equivalent to English *painful*) by taking a frame semantic approach. The previous studies have treated *itai* as one of the sensory/emotion adjectives, focusing only on its prototypical meaning. However, once we take a look at examples extracted from Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), we can easily see that *itai* serves to express a wide variety of different meanings. When *itai* is used to talk about the physical domain, it may mean “painful” or “be in pain”. When, on the other hand, it is used to evaluate a property of a person, it means something like “cringy” or “shameful.” This paper demonstrates that *itai* evokes six different frames and has six different meanings, some of which are figurative. It also indicates how these frames are related to each other.

(さかぐち・けい 東京大学総合文化研究科 博士課程)